

入学式告辞

新入生のみなさん、入学おめでとう。

今日のこの晴れやかな卒業の日を記念し、学長として一言、お祝いと励ましの言葉を申し述べたいと思います。

1 「出会い」の場をひらく、そして我慢強く

今日、入学を許可された皆さんの一人ひとり、考えてほしいことがあるのです。

人は、何のために学ぶのか、ということです。

人は、生きる糧を得るために学ぶ——それが私の答えです。

では、人は何のために生きるのでしょうか？

もしも、皆さんからじかにそう問われたなら、私はこう答えようと思います。

人は、生きる喜びを確認するために日々生きています。

生きる喜びを確認できたときに、人間の生命ははじめて価値をもつのだ、と。

では、どうすれば、喜びや幸せは手にできるのでしょうか。

人生は、一割の喜びと、九割の苦しみからなっている、といつても過言ではありません。そうした現実のなかで、喜びや幸せを確実に自分自身のものであるには、自分の力で、勇気をもって、「出会い」の場を切り拓いていかななくてはなりません。その努力を惜しんでいては、けつして何もものも手に入ることはいけません。

大切なことは、恐れずに、喜びと幸せを得ようと努力することです。物怖じしないこと。自分には、力があると信じていること。

では、「出会い」の基本とは、何でしょうか。「出会い」とは、「知る」こと。「学ぶこと」そのものではないでしょうか。友人との出会いも、文学や、芸術との出会いも、すべては、「知る」、そして「学ぶこと」が基本です。しかし、「出会い」が、生きる喜びや幸せへと実を結ぶには、それなりの努力が必要なのです。

私のモットーは、とても単純です。

「石の上にも三年」という諺はご存知ですか。

「石の上にも四年」は、もはや立派な才能の証だと思っております。

私は、一人の文学者として、長い期間、友人たち、教員たちに誇れるだけの忍耐を重ねてきたつもりです。長い時間の苦しみに耐えるだけことができなければ、何ひとつ、価値あるものを生み出すことはできないということを知ってほしいと切に願っています。

2 4Cの「ちから」

さて、今日、私たちの日本でしきりに叫ばれている言葉があります。新入生の皆さんにぜひそのことを知ってほしいと思います。その言葉とは、「グローバル人材(Global Human Resource)」です。とくに、二〇一一年三月の東日本大震災以降、私たちが暮らす日本の社会全体に閉塞感が強まるなか、内向きのまま、自分の殻に閉じこもることは許されなくなりました。殻のなかに閉じこもった自分を、だれかがそと助け出してくれるという幻想は抱けなくなつたのです。ですから、皆さんには、自分から積極的に殻を破り、殻を棄てて、外の世界に歩み出してほしいと思います。世界には、殻のなかでは経験できない、目も眩むような素晴らしい驚きや出会いが待ち受けているのですから。

では、「グローバル人材」とは、どのような人材を言うのでしょうか。

グローバル社会とは、勝つことを至上の価値とみなす「競争」社会です。地球という巨大な広がりの中にあって、勝者が一人しかいない、という恐ろしい状況がしばしば生じます。しかし、どのように華々しい勝利であれ、かりに地球上に住む人々の平和的な「共生」がなければ、どうして持続的な幸福とはなりえません。私たちの多くが、この矛盾した状況のなかで、勝つか、負けるか、という戦いのなかで、悩み、苦しみながら、生きています。

「グローバル人材」となるために求められているのは、第一に、すぐれた「教養力(Culture)」であり、第二には、その教養力の上に培われる高い「専門性(specialty)」です。

しかし、現実には、一個の社会人として将来、長い人生を生き抜いていくうえで求められる具体的な「ちから」とは、次の4つです。

① コミュニケーション力(communication)

このためには、日本語と外国語の基礎をしっかりと学び、そのうえで、社会人としてきちんと評価されるための教養を身につける必要があります。

② 創造性(creativity)

自分に何ができるか、自分という人間が何に向いているのか、何を得意としているかを発見しなければなりません。

③ 協調精神(cooperation)

端的に、協力しあつて何かを実現しようというポジティブな態度です。

④ 社会貢献の意識(contribution)

世界には、幸せな人がいれば、不幸せな人もいます。自分の持てる力を、人々の幸福のために役立てようという自己犠牲の精神です。

これら4つの「ちから」が、グローバル人材として世界を舞台に広くはばたくために必要とされるものであり、それは、同時に、NUFSの学生たちが限られた年限のなかで確実に獲得することを期待されている「能力」でもあるのです。

3 「批判的思考」と「共感力」を育てる

さて、大学は、しばしば、「批判的思考(critical thinking)」を鍛える場であるとされています。「批判的思考」とは、人の弱みやミスや批判にさらすための思考ではありません。「批判的思考」とは、自分の経験をとおして得られた知識や情報を、客観的かつ冷静に吟味・選別し、分析・総合することを通して、将来、自分自身の行動の正しい指針とすることをいいます。今日のような厳しい競争社会にあって、しっかりと地に足をつけて戦いぬくために「批判的思考」は、不可欠の道具であり、自立のための武器でもあります。

しかし、同時に、世界の人々とともに生きるという理想にもしっかりと目を向けなくてはいけません。ともに幸せに生きることが実現して、はじめて、個人としての自立や幸福の価値も生まれるからです。では、そのために不可欠な能力とは、何でしょうか。思うに、それは、他者の喜びや苦しみや心をついてあげる「共感力(sympathy)」です。私は、このNUFSで、相手の痛みに対する思いやり、人々のために役に立ちたいと真摯な思いに溢れる学生を育てたいと念じています。「協調精神(cooperation)」も、「社会貢献の意識(contribution)」も、それぞれ源は「共感力」にあるのです。また、文学や芸術にたいする豊かな感受性や想像力を育てるのも共感力です。文学や芸術に深い造詣をもち、人々と素直に喜びや悲しみを分かちあひ、同時に、世界の政治や経済といったマクロな動きについて堂々と議論できる心優しいグローバル教養人となることをめざしてほしいと願っています。

おわりに

名古屋外国語大学のアイデンティティとは、「言葉」です。

「言葉」とは、可能性という名の大地を耕す鋤のようなもの、と同時に大地の実りそのものです。いや、大地の実りを味わう喜びもやはり言葉から生まれてくるかもしれません。どうか、新入生のみなさん、若い農夫になつたつもりで、素直な心もちで外国語や日本語を学び、世界と日本の文化に親しみ、世界と日本社会の現実を知り、生きて、ここにある喜びを経験してください。そして、社会人となられてからは、それらの学びから得た喜びをバネに、思いきりはばたいてください。皆さんのここからの努力と将来における活躍によって、私たちの大学NUFSの輝きと未来もまた、日々、更新されていくことでしょう。

最後に、皆さんに一言、プレゼント。

Catch yourself and your Globe!

以上をもって、学長の告辞といたします。

二〇一三年四月一日

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫